

# 心を育ててくれる二つの物語

間瀬 啓允

猫はカモメに飛ぶことを教えることができるでしょうか？

お話ししましょう。これはヨーロッパで大ベストセラーとなった愛と感動の物語です。

## カモメに飛ぶことを教えた猫

大きな太った黒猫君ゾルバが、バルコニーでのどをゴロゴロ言わせながら、日光浴を楽しんでいました。そこへドサツと大きな黒い塊が落ちてきました。そう、飛んできたというより、空から降ってきた！

見るも無残。重油の流れに呑まれたのでしょうか。体中べつとりと重油をかぶったカモメが息絶え絶えの、瀕死

の状態でした。

カモメは消え入りそうな声で目の前の黒猫君ゾルバに願ひ出ました。「わたしはこれから最後の力を振り絞って卵を産みます。三つの約束をして下さい。卵を食べない。卵を温めて雛にかえす。そして雛を大きく育てて、飛ぶことを教える。」

「男の中の男」ならぬ「猫の中の猫」とばかりに、この黒猫君ゾルバは必死の母カモメの願ひを受け止めました。

「ようし、わかった。三つの約束、守る。」

けれども、その約束を守るには大いなる知恵と、周りのみんなの協力が必要でした。幸いなことに、みんなの協力が得られました。卵を温めました。とうとう、雛がかえった。かわいらしいカモメちゃんでした。すくすく

と育ちました。ひと月もたつと、すらりと優美なカモメ嬢に成長していました。

猫仲間のみんなは、自分たちのもとへやつてきた「幸せ者」という意味の「フォルトゥナータ」という名前をつけました。それから、港の猫に伝わる洗札の儀式をおこないました。

「諸君、我々は幸せなる者フォルトゥナータをここに迎える。」

「よつよつよつー！」

と向かい風が威勢良く叫びました。

黒猫君のゾルバには、まだ一つ果たさなくてはならない約束が残っていました。そうです。カモメに飛ぶことを教えることでした。「ママ、ママ。」とカモメ嬢フォルトゥナータは黒猫君ゾルバになつています。黒猫君ゾルバは頭をかきかき言いました。

「おれはオス猫で、ママではないのになあ。でも、まあいいや。オス猫のぼくを慕って、ママ、ママとなつてくれるのだから、かわいものだ。」

ある晩、カモメ嬢フォルトゥナータは、人間のご機嫌

取りの小ざかしいチンパンジーから、とんでもない事を知聞かされました。

「お前は本当におバカさんだよ。あの猫どもにだまされてるんだ！お前はカモメで二本足。猫は四本足。お前の体にあるのは羽。猫にあるのはしっぽ。お前はカモメで、猫じゃない。あの連中がどうしてお前のことをちやほやしているのか、教えてやろうか。お前をうんと太らせて、豪華な宴会を開くためだよ。あいつらはお前を丸ごと食つちまう気さ。羽から何から全部よ。」

その晩、フォルトゥナータは猫たちのもとには帰りませんでした。夕食には大好物のイカが用意されていたのですが……。ゾルバたちは、心配してほうぼう探し回りました。そうして、ようやく見つけました。悲しみに打ちのめされている様子のフォルトゥナータを見て、尋ねました。

「どこか具合でも悪いのかい。好物のイカ、食べたくないのかい。」

「わたしを太らせたいから食べろつて言うの。わたしが太ったら、みんなでわたしを食べる気なの。」と、フォ

ルトウナータは、目に涙をためて言いました。

「どうしてそんなバカなことを言い出すんだ。」と、ゾルバはきつとして言いました。

フォルトウナータは涙をこらえながら、チンパンジーに言われたことを話しました。ゾルバはフォルトウナータの涙をなめてやりました。そうして次の瞬間、自分が今まで鳴いたことがないような声で、力をこめて鳴いているのに気がつきました。

「君はカモメだ。チンパンジーの言ったことで正しいのは、ただそれだけだ。だが、ぼくたちはみんな君を愛している。たとえ、君がカモメでも。いや、カモメだからこそ、君が美しいカモメだからこそ、愛しているんだ。君がこれまで自分を猫だと言うのを黙って聞いていたのは、君がぼくたちのようになりたいと思ってくれることがうれしかったからだ。でも、本当は、君は猫じやない。君はぼくたちとは違っていて、いや、違っているからこそ、ぼくたちは君を愛している。

ぼくたちは、君が卵から出てきたときからずっと君のことを守ってきた。君のことを猫にしようなどとは一度

も考えずに、心の底から愛情を注いできた。ぼくたちは、君をカモメとして愛しているんだ。そうして君のほうも、ぼくたちを愛してくれていると思っている。ぼくたちは君の友達だ。家族だと思っている。何でぼくたちが君を食べることがあるものか。

君のおかげで、ぼくたちは自分と違っている者を認め、尊重し、愛することを知ったんだ。自分と似た者を認めたり、愛したりする事は簡単だけれども、違っている者の場合はとても難しい。でも、君と一緒に過ごすうちに、ぼくたちにはそれができるようになった。

いいかい、君はカモメだ。そして、カモメとしての運命をまつとうしなくてはならない。だから、君は飛ばなくてはならない。飛ぶことができてこそ、君は本当に幸せになれる。君が本当に幸せになったとき、君に対するぼくたちの気持ちは今よりもずっと、ずっと、強く、かけがえのないものになるはずだ。だって、そうだろう。これは、まったく違つた者どうしの愛なのだから。」

「でも、わたし、飛ぶのが怖い。」と、フォルトウナータは涙をこぼしながら言いました。

「大丈夫。ぼくがいつも君の隣についてあげてあげてから。君のお母さんと約束したんだから。」

数日後、ゾルバはフォルトゥナータを連れ出して、高い塔の頂上に登りました。どんより曇った空からは、雨が降り始めていました。

「フォルトゥナータよ、いよいよ飛ぶときがきた。さあ、深呼吸をして。雨にさわってごらん。雨を感じてごらん。君の好きな雨だよ。君には好きなものがたくさんある。そのひとつが水だ。もうひとつは風だ。さあ、翼を広げて。」

フォルトゥナータは、翼を広げた。そうして、頭を上げた。

「雨、水、好きだわ。」

「さあ、飛ぶんだ。」

「あなたのこと、好き！ あなたは本当に優しい猫。」  
そう叫ぶと、カモメ嬢フォルトゥナータは身を乗り出しました。

「さあ、飛ぶんだ。この大空すべてが君のものなのだ。飛べ。」

カモメの姿が消えた。まっさかさまに墜落していった。黒猫君はあわてて、身を乗り出して下を見た。すると、カモメ嬢は翼を上下させているではないか。そして、上へ上へと舞い上がり、とうとう猫のいる塔よりも高く高く羽ばたいていた。

「飛んでる。飛んでる。最後の最後になって、空中で、一番大切なことが分かったんだ。」と、猫のゾルバは叫びました。

(ルイス・セプルベダ著『カモメに飛ぶことを教えた猫』  
河野万里子訳、白水社、一九九八年)

「一番大切なこと」とは、何だったのでしょうか。それは心の奥底で、是非ともそうしたいと願った者が全力で挑戦したときに、飛ぶことができた、ということではないでしょうか。猫のゾルバは、大空を舞うカモメのフォルトゥナータの姿を見つめて、そう悟ったのではないかと、私は思うのです。

この物語から気づかされることは、違った者を愛することは難しいけれども、違った者を愛することはできる、

ということではないでしょうか。違うから、といって嫌ったり、排除したり、無視したりするのではなく、「違う者どうしの愛こそ尊い」ということに気づかされるのではないのでしょうか。

では、この「私」と違っている者、「違っている者どうし」というには、誰のことでしょうか。健康者と身体不自由者、車イスの人、盲導犬を必要とする人、難病で寝たきりの人、筋ジストロフィーの療養者……。もつと身近に考えましょう。それは「私」と「あなた」のことではないでしょうか。「私」と「私のお隣さん」、「私」と「私の仕事仲間」、妻と夫、親と子、老人と若者……。

ちなみに、からだは不自由になっても、心は成長しつづけるもののようにです。体育の実技で事故を起こし、そのまま首から下を動かすことができない身となつてしまった中学校の先生のこと、ご存知でしょうか。今は車イスの人になり、口に絵筆をくわえて、美しい心の絵を描き、そこにキラキラ輝くダイヤの言葉を書き添えています。

その先生の名は星野富弘さん。星野さんの絵と言葉は、

カレンダーや絵葉書になつていきますから、広く世に知られています。ここに二枚の絵葉書があります。そこに星野さんは、こういう言葉を書き添えています。

いのちが一番大切だと思つていたころ  
生きるのが苦しかった

いのちより大切なものがあると知つた日  
生きているのが嬉しかった

「いのちより大切なもの」とは何のことでしょうか。それはいのちの根っこ。つまり「いのちを与え、いのちを育み、いのちを支えてくれるもの」のことではないでしょうか。英語では、これを「something great」といつて、「何か偉大なもの」「人間以上のもの」を意味します。もう一枚の絵葉書には、こういう言葉が書かれています。

木のように 歳をとれたらいいな

鳥を憩わせる枝は 大きく横にまがり

たまにはここに腰掛け 休みなさいと

人間にも言っているようだ

欲を重ねて老いるのではなく

木のように 歳をとれたらいいな

「欲を重ねて老いるのではなく 木のように 歳をとれたらいいな」…。心が成長し、人間性が高められた人の言葉は、まさにルビーやダイヤモンドですね。

星野さんは本も書いています。『かぎりなく、やさしい花々』（偕成社、一九八六年）の中で、星野さんはこう言っています。「車イスに乗るようになって、とても大事なことを知ることができました。私が元気だったころ、からだの不自由な人を見ればかわいそうとか気味が悪いとさえ、思ったことがありました。でも、自分が車イスに乗るようになって、はじめてわかったことなのですが、からだの不自由な自分を、不幸だとも、いやだとも、少しも思わないのです…。からだは傷を受け、確かに不自由ですが、心はいつまでも不自由ではないのです。不自由と不幸は結びつきやすい性質をもっていますが、全

く別物だったのです…。不自由な人を見て、すぐに不幸ときめつけてしまったのは、私の心が貧しかったからでした。でも、今ではいやだと思っていたものが、美しく見えるようになりました。それは心の中に宝物を持ったような喜びでもありました。」

星野さんが失ったものは五体満足なからだでした。けれども、得たものは真実を見る目、小さなことに感謝する心だったのです。心が育ち、人間性が高められると、こういうふうになるのですね。

五体不満足といえ、乙武洋匡（おとたけ・ひろただ）さんもそうですね。超ミリオンセラーの『五体不満足』（講談社、一九九八年）の中で、「障害イコール可哀想ではけっしてないのです。そのことが分かってもらいたいのです。」と訴えています。障害は不便でも不幸でもありません、ときっぱり言い切ることのできる心は、見事に成長した心だと思えます。

このように、からだは不自由でも、心は成長しつづけます。そのからだが衰えて血圧が下がれば、人は死にます。けれども、死ぬまでは生きている「いのち」のなかで、

人の心は成長しつづけます。心が成長しきったところで、からだは死ぬのです。「死は成長の最終段階」(キユーブラー・ロス女史)なのです。

心を育ててくれる、もう一つの物語は『葉っぱのフレディ』です。この本は、カルフォルニア大学の教育学の教授、レオ・バスカーリア博士が書いた生涯でただ一冊の絵本です。バスカーリア博士は、自分の力で考えることをはじめた子どもたちにこの絵本を読んでほしい、そして子どもを持つ大人たちにこの絵本を読んでほしい、と言っていたそうです。

## 葉っぱのフレディ ―いのちの旅―

春が過ぎて 夏が来ました。

葉っぱのフレディは この春 大きな木の梢に近い  
太い枝に生まれました。

そして夏にはもう 厚みのある りっぱな体に成長し

ました。

五つに分かれた葉の先は 力強くかかっています。

フレディは 数えきれないほどの葉っぱに とりまかれています。

はじめフレディは 葉っぱはどれも自分と同じ形をしていると思っていました。やがて ひとつとして同じ葉っぱはないことに 気がつきました。となりのアルフレッド 右側のベン すぐ上のクレアは女の子です。みんな春に生まれて いっしょに大きくなりました。春風にさそわれて くるくる 踊る練習をしました。日光浴のときは じつとしているのがよいということも覚ええました。夕立ちがくると いっせいに雨に体を洗ってもらいました。

フレディの親友は ダニエルです。だれよりも大きくて 昔からいるような顔をしています。考えることが好きで 物知りでした。ダニエルはフレディに いろいろ教えてくれました。フレディが木の葉っぱだ ということ。木の根っこは 地面の下にあって 見えないけれど 四方に張っていて だから 木は倒れないこと。目の下

にあるのは公園で、おはようとあいさつにくるのは小鳥たちであること。月や太陽や星が 秩序正しく 空をまわっていること。そしてめぐりめぐる季節のことなど みんなダニエルが教えてくれたことです。

夏になると フレディは ますますうれしくなりました。お日さまが早く昇つて おそく沈むので たくさん遊べます。かんかん照りの暑さは なんて気持ちがいいのでしょうか。夜になつても 昼間の暑さが残っているのですから フレディは気持ちがよくて 夢をみている気分です。

公園に 木かげを求めて 大ぜいの人がやってきました。ダニエルは立ちあがり 「さあ 体を寄せて みんなでかげを作ろう。」と呼びかけました。

フレディは ダニエルに たずねました。「どうしてそんなことをするの？」するとダニエルは「暑さから逃げだしてきた人間に 涼しい木かげを作つてあげると みんな喜ぶんだよ。」と言いました。ダニエルの言った

とおりでした。木かげに おじいさんやおばあさんが 集まつて来ました。子どもたちも来ました。お弁当を広げる人もいます。フレディたちは 葉っぱをそよがせて 涼しい風を送つてあげました。

「フレディ これも葉っぱの仕事なんだよ。」

けれど 楽しい夏はかけ足で通り過ぎていきました。たちまち秋になり 十月の終りのある晩 とつぜん 寒さがおそつて来ました。

フレディも 仲間のアルフレッドも ベンもクレアも ぶるぶるふるえました。

みんなの顔に 白く冷たい粉のようなものがつきました。朝になると 白い粉はとけて 雫がキラキラ光りました。

風が変わつたのは そのあとでした。夏の間 笑いがらいつしよに踊つてくれた風が別人のように 顔をこわばらせて 葉っぱたちにおそいかかつてきたのです。葉っぱはこらえきれずに吹きとばされ まき上げられ

つぎつぎと落ちていきました。

「さむいよう」「こわいよう」 葉っぱたちはおびえま  
した。そこへ 風のうなり声の中からダニエルの声が  
とぎれとぎれに 聞こえてきました。「みんな 引っこ  
しする時がきたんだよ。とうとう冬が来たんだ。ぼくた  
ちは ひとり残らず ここからいなくなるんだ。」  
フレディは悲しくなりました。ここはフレディにとつ  
て 居心地のよい 夢のような場所だったからです。

「ぼくもここからいなくなるの？」

「そうだよ。ぼくたちは葉っぱに生まれて 葉っぱの  
仕事をぜんぶやった。太陽や月から光をもらい 雨や風  
にはげまされて 木のためにも他人のためにもりっぱに  
役割を果たしたのさ。だから 引っこすのだよ。」とダ  
ニエルは 答えました。

「ダニエル きみも引っこすの？」とフレディはたず  
ねました。

「ぼくも引っこすよ。」

「それはいつ？」

「ぼくのぼんが来たらね。」

「ぼくはいやだ！ ぼくはここにいますよ！」とフレディ  
は 大声で叫びました。

アルフレッドもベンもクレアも そのとき が来て  
引っこしていきました。見ていると風にさからって 枝  
にしがみつく葉もあるし あつさりはなれる葉っぱもあ  
ります。やがて木は葉を落として 裸どうぜんになりま  
した。残っているのは フレディとダニエルだけです。

「引っこしをするとか ここからいなくなるとか き  
みは言ってたけれど それはー」とフレディは胸がいつ  
ぱいになりました。

「死ぬ ということでしょ？」

ダニエルは口をかたくむすんでいます。

「ぼく 死ぬのがこわいよ。」とフレディが言いました。

「そのとおりだね。」とダニエルが答えました。

「まだ経験したことがないことは こわいと思うもの  
だ。でも考えてごらん。世界は変化しつづけているんだ。  
変化しないものは ひとつもないんだよ。春が来て夏  
になり秋になる。葉っぱは緑から紅葉して散る。変化す

るって自然なことなんだ。きみは春が夏になるときこわかったかい？ 緑から紅葉するとき こわくなかったろう？ ぼくたちも変化しつづけているんだ。

死ぬというのも 変わる一つのつなのだよ。」

変化するって自然なことだと聞いて フレディは少し安心しました。枝にはもう ダニエルしか残っていません。

「この木も死ぬの？」

「いつかは死ぬさ。でもい・の・ち・は・永・遠・に・生・き・て・い・る・の・だよ。」とダニエルは答えました。

葉っぱも死ぬ 木も死ぬ。そうなると 春に生まれて冬に死んでしまうフレディの一生には どういう意味があるのでしょうか。

「ねえ ダニエル。ぼくは生まれてきてよかつたのだろうか。」とフレディはたずねました。

ダニエルは深くうなずきました。

その日の夕暮れ 金色の光の中を ダニエルは枝をは

なれていきました。

「さようなら、フレディ。」

ダニエルは満足そうなほほえみを浮かべ ゆつくり静かに いなくなりした。

フレディは ひとりになりました。

次の朝は雪でした。初雪です。やわらかでまっ白でしずかな雪は じんと冷たく身にしみました。その日は一日中どんよりとしたくもり空でした。日は早く暮れしました。フレディは自分が色あせて枯れてきたように思いました。冷たい雪が重く感じられます。

明け方フレディは迎えに来た風につて枝をはなれました。痛くもなく こわくもありませんでした。

フレディは 空中にしばらく舞つて それから そつと地面においていきました。

フレディがおりましたところは雪の上です。やわらかくて意外とあたたかでした。引っこし先は ふわふわして居心地のよいところだったのです。フレディは目を閉じね

むりに入りました。

フレディは知らなかったのですが――

冬が終わると春が来て 雪はとけ水になり 枯れ葉の  
フレディは その水にまじり 土に溶けこんで 木を育  
てる力になるのです。

い・の・ち・は・土・や・根・や・木・中・の  
目には見えないところで  
新しい葉つばを生み出そうと 準備をしています。大自  
然の設計図は 寸分の狂いもなく い・の・ち・を・変・化・さ・せ・つ  
づけているのです。

また春がめぐってきました。

(レオ・バスカーリア作『葉つばのフレディ―いのちの  
旅―』みらい・なな訳、童話屋、一九九八年)

葉つばの変化に人間の「いのち」を重ね合わせたこの  
絵本が、中年以上の男性にも読まれています。たとえば  
俳優の森繁久弥さんは、この絵本と出会い「人生をもう  
一度、力一杯生きようと決心した」といいます。森繁さ  
んが八十六歳のとき、今から五年前のことですが、長男

の泉さんをガンで亡くしました。お葬式を終えて、森繁  
さんは生きていく希望を失い、仕事をする気力もまった  
く失ってしまったそうです。そうした時に巡り合ったの  
が、この『葉つばのフレディ』でした。森繁さんは、そ  
のときのことをこう述懐しています。

これを読んでいるうちに、涙がどんどん流れて止まら  
なかった。「いのちは循環する」という言葉に接して、いつ  
たんは失った気力を取り戻しました。「息子のいのちは  
永遠に生きているんだ」と実感することができました。  
この私も葉つばのフレディだ。だからこれからの人生を  
もう一度、精一杯生きよう。そう決心することができま  
した。

八十六歳の森繁さんの心をいま一度奮い立たせ、人間  
性を高めたのが、この『葉つばのフレディ』だったのです。  
(日野原重明「甦った森繁久彌さん」『フレディ』から  
学んだこと』所収、童話屋、二〇〇〇年)

『葉っぱのフレディ』の翻訳をした「みらい なな」さんは、「いのちの旅」という副題をつけました。というのも、『葉っぱのフレディ』の作者バスカリア博士が、「人生はゴールではない。旅路だ。」と言っていたからです。真に、いのちは旅をしているのですね。そして、いのちの旅のあいだに心は育ち、人間性が高められていくのですね。「いのちの大切さ」を物語が伝え、その物語によって心が育てられていく。そういうふうに考えて、私は心の育成ということに納得しているのです。